郷土室だより

第 21 号

昭和53年6月15日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電 話 543－9025

切絵図考証 八

安藤菊二

第11 蛎殻町三丁目

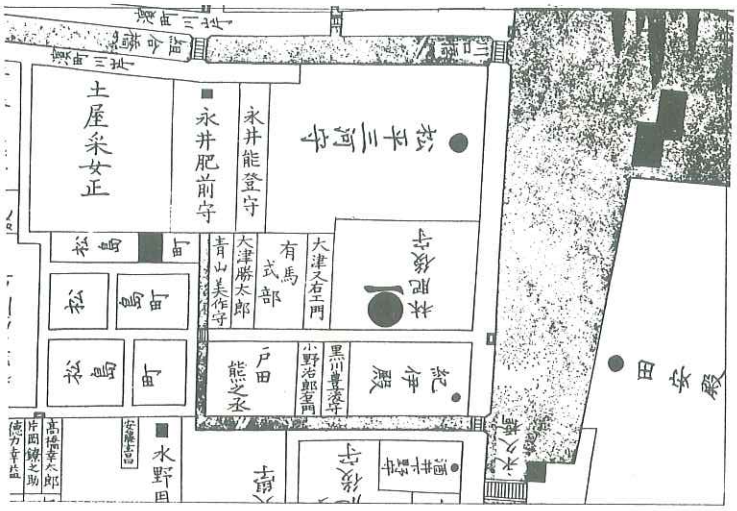
昔日の蛎殻町三丁目は、現在は蛎殻町二丁目と人形町の一部に区画された。

旧かぎがら町二丁目と三丁目の境界をなす土州橋通りには屋敷堀があった。

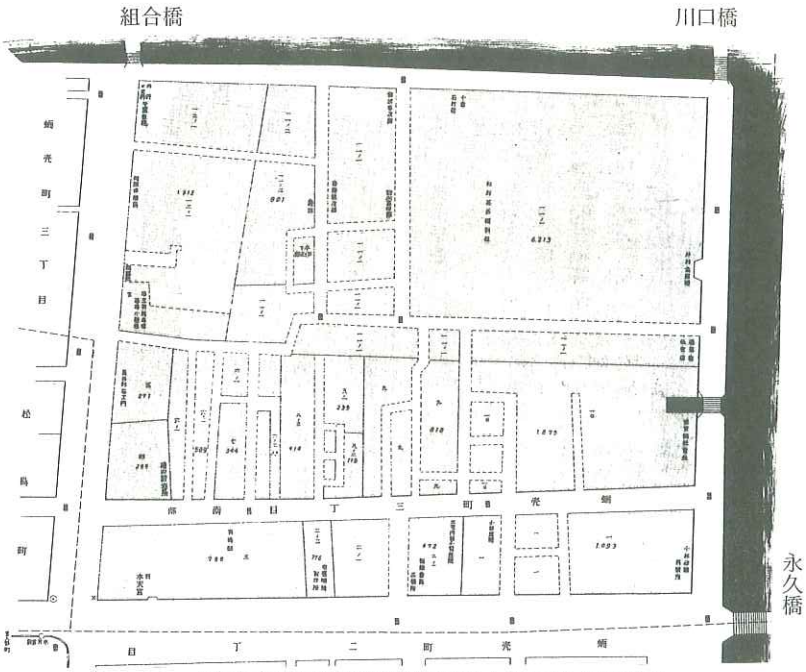
住吉町と浪華町の東を流れる、俗にいう「へっつい河岸」の中間あたりから東に分岐した堀川が松島町の東北角で曲折して、後の新大橋通りを武家屋敷添いに流れ、現在の水天宮の角地で再び折れ曲り、現在の土州橋通りをやや広い屋敷堀となって流れ、箱崎川に流れこんでいたのである。堀の吐口の河岸をつないで「紀伊国橋」が架っていた。紀州家持の橋だったのであろう。

○紀伊殿

紀州和歌山藩徳川家の中屋敷であっ



尾張屋版「日本橋北内神田両国浜町明細絵図」
安政6年（1859年）



「東京市及接続郡部地籍地図」大正元年（1912年）

た。主は旧封五五万五千石の大守である。上屋敷は赤坂喰違に、中屋敷は、麹町五丁目、南八丁堀、浜町に、下屋敷は渋谷、千駄谷、芝海手などにあった。紀州家が浜町（蛎殻町三丁目）の中屋敷を入手したのは比較的新らしくあの浩瀚をもって鳴る『南紀徳川史』もこの屋敷については、あまり語るところがない。

浜町邸　維新後蛎殻町三丁目一番地

文政十三寅年二月十二日牧野山城守中屋敷二千坪を三方相対替にて御譲受け、浜町御屋敷と唱ふ。

坪数二千坪　天保十三年屋敷改へ書上面

一、天保五午年二月七日神田佐久間町より出火にて類焼。

一、明治元辰年十二月御差上之処、翌二己年十二月御願之通当分御拝借済。

一、同三午年七月九日府下諸藩官私邸壱ヶ所に被定たるに付、同年十一月十二日御差上、然して当邸の儀は藩地より運送之節荷物水揚等便利に付、以来為三蔵地地面一御拝借之儀、御願之通同月廿日を以相済、相当の地代上納可レ致旨指合あり。

当邸建物は左之如く、三山方にて出金有レ之たる由。本邸は紀伊國屋万蔵へ貸与したると見へたり。

御殿　九百坪。横蔵二ヶ所にて四拾弐坪

御長屋　八拾三坪。二階建表長屋三拾一坪半

表蔵　三拾坪。門番所　拾坪。

奥蔵　弐拾四坪。門　弐ヶ所。

（『南紀徳川史』第一七冊九二五～六頁）

紀州家の中屋敷を焼いた天保五年二月七日の大火は、神田佐久間町から出火し、西北の風が烈しかったため、両国、日本橋、八丁堀辺、築地門跡近辺まで下町一円を焼く大火事となった。『視聴草』に焼失した町々のことを詳記していて、

「かきがら丁、水野壱岐守。実忠中屋敷内長屋四棟、松島町辺不レ残、高家吉良武部、中奥御小姓戸田近江守、御徒頭小野次郎右衛門、御小納戸黒川内匠、小普請組曽根日向守支配大津右近、夫よりとうかん堀辺不レ残、松平玄蕃頭。恵忠屋敷不レ残、寄合戸田大学、御勘定組頭竹内平之丞、本多肥後守。敬忠西丸御留守居奥山佐渡守酒井雅楽頭。実忠中屋敷、酒井出雲守。恒忠紀伊殿。斉順徳川尾張殿。斉温徳川御屋鋪、松平越中守。永定蔵屋鋪、安藤對馬守。由信中屋敷表長屋少々残る。夫より新大橋焼焼、夫より飛火にて箱崎…

（市史稿、変災篇第五―五一一頁）

と記している。焼けた武家屋敷の主の役職が記してあるので、切絵図の調査に教えられる所が多い。

話が逸れた。切絵図に戻ろう。

○黒川豊後守

「御目付衆、黒川左仲（父豊後守）千六百石、かきがら丁」（安政六年武鑑）

○小野治郎右衛門（未考）

「御先手御鉄砲頭、八百石、はま丁」（文久二年武鑑）

○戸田熊之丞

武鑑ではちょっと検出しかねた。前記『視聴草』に記す。中奥御小姓戸田近江守の子息ででもあろうか。

（この戸田氏の邸地を、維新後久留米藩主有馬家が入手して、明治五年に、芝赤羽時代からすでに衆庶の厚い信仰をかち得ていた。安産の守り神「水天宮」をここに遷座した。たぶん明治十年ごろに撮影したものかと思われる、当時の有馬家の表門を撮影した珍らしい写真が「にほんばし人形町」に載っている。（下図）

屋敷前を流れる堀の石垣を、そのまま長屋の土台にするほど、ギリギリに土地を利用しているのが珍しくわれ等の眼に映る。橋台を含めてわずかな地所を門前の空地として、大きな屋根を戴いた大門がいかめしく大戸を閉ざしている。少しく高所から映した写真なので、門内に大きな鳥居や、左方に千木を棟に載せた水天宮様の屋根が見える）

○青山美作守

「青山三右衛門、二百俵、御小納戸衆、はま丁かきがら丁」（安政六年武鑑）

○大津勝太郎

「大御番遠山安芸組与頭」

（市史稿、市街篇第三九―五三四頁）

明治5年に赤坂から移転した有馬邸

○有馬式部

「御使番、三千石、はま丁」（文久二年武鑑）

○大津又右エ門（未考）

○林肥後守

「在所、上總望陀郡請西、一万石、菊之間詰。朝散大夫。上屋敷、かきがら丁、大御番頭」（安政六年武鑑）

「伏見奉行」（文久二年武鑑）

○松平三河守

美作西條郡津山、十万石の大守。当主は慶倫、安政二卯五月家督を継ぐ。

「慶長十一年徳川家康の庶子秀康を初祖とす。享保十一年松平知清の二子長淵五万石を賜はりて津山城に居す。文化十四年康孝に至って五万石を加封さる。明治二年六月慶倫に至って津山藩知事に任ぜらる。」（列藩要鑑）

この邸地については、市史橋に

「安政二年八月廿一日

浜町清水屋敷之内、四千八百八十九坪余、家作共被下之、松平三河守え右於御黒書院、老中列座、同人内藤信頼申渡之」（市街篇第四四―二〇三頁）

とある。

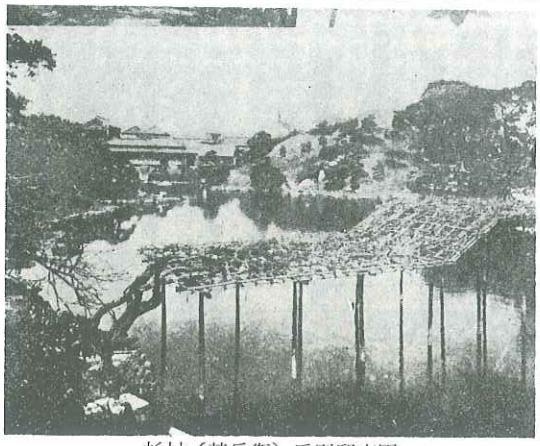
明治六・七年頃に、この元津山藩邸の一部に、箕作秋坪が三叉学舎を開き、洋学を教えた。子弟に北條時敬・本山彦一氏ら有為の人材が輩出している。

なお、津山藩邸地は、後、堀留の豪商杉村甚兵衛氏の邸地となった。

杉村氏の庭園については旧刊『日本橋区史』に記すところがある。

蛎殻町三丁目十一番地に、杉村甚兵衛氏の別邸あり。寛永図に此辺水野備中と標し、宝永図に阿部伊予とあり、安政の頃松平三河守の邸地となる。庭園はその邸址にかゝり、北に浜町川を控え、東は箱崎川に枕みて、直に大川に棹すべし。園内広濶、松平氏の上地後、杉村氏の修補にかゝり、築山ありて登るべく、泉池ありて舟を浮ぶべし。布置の妙、結構の雄大、区内屈指の名園たり。尚老樟（くすのき）あり、枝葉蓊鬱として隅田の川風に戦ぐ、亦市内稀有の老樹と謂ぶべし。」（大正五年刊本）

（現在、松平三河守邸地は、蛎殻町公園、有馬小学校、渋沢倉庫株式会社倉庫などのある一区画に当る。）



杉村（甚兵衛）氏別邸庭園
「日本橋区参考畫帖」

○永井能登守

安政六年武鑑に「父勘ケ由、千石、はま丁、西丸御留守居、安政五年二月ヨリ」とある。

○永井肥前守

「居城、美濃厚見郡加納、三万二千石、天保十亥七月家督、雁間詰、朝散大夫。御詰衆、三万二千石、はま丁矢のくら」（安政六年武鑑）

○土屋采女正　寅直

「居城、常州新治郡土浦、九万五千石、天保九戌十二月家督を継ぐ、雁間詰、四品、嘉永三戌九月叙」（安政六年武鑑）

○維新後、松平邸と永井邸の間に小道が通じ、水天宮方面から真直に浜町川へ抜けることができるようになった。

永井両家の地所は旧広島藩主浅野長勲侯の所有地となり、明治五年二月、ここにわが国における西洋流の機械製紙工場、有恒社の設立をみた。

有恒社がイギリスに注文したアンフェルトン社の抄紙機は明治六年に到着し、七年六月から操業を開始し、予期通りの成績をあげることはできたが、残念なことに、当時はまだ洋紙の需要というものがほとんどなく、仕方なく浅野家の定紋、「扇おもだか」と「鷹の羽」をすき入れた厚手の襖紙ばかりを漉いて急場をしのいでいたそうである。浅野家では三九年に有恒社から手を引き、大正七年には会社の事業は王子製紙会社の手に移った。

つい先頃亡くなられた安田靱彦翁の「幼少の頃」という文章の中に

……三階の六角の塔のやうなものがあった如何にも明治初年らしい味を持った木造洋館建ての有馬学校は、今でも懐しく思ひ出される。森田勝先生が校長であった。私が入学した頃には、水天宮から新大橋へ通ずる通りは、道幅もまだ極く狭く、丁度

水天宮から這入ったあの通りが、学校の手前までが稍広目で、学校から先は片側が有功（恒）舎の煉瓦塀で道がすっと細くなってゐた。

学校の門は水天宮から行った横町のとっつきの角に、西向きに開いてゐたのである。（『季刊、日本橋』第三号）

というひとこまがある。

蛎殻町一丁目　追記

○稲荷堀（とうかんぼり）

蛎殻町一丁目と小網町堺を流れていたこの堀割は、天保五年二月の大火前までは、長さ一九五間（約三〇〇㍍）幅七間三尺余（一三㍍強）深さ八尺ほどの入堀だった。天保のころは、あちこち埋り葭などが生えて、通船の役にもたたなくなっていたので、天保五年二月五日の大火後、焼跡の瓦礫で大部分が埋立られた。当時勝志摩守、泉本主水正両名名儀で提出された御内意伺書に、当時の堀のようすの知られるものがあるから、次に転載しておく。

略。前浜町、蛎殻町松平越中守。定永酒井雅楽頭。忠実屋敷後入堀、当時押埋、船入川岸揚等相成不レ申、右は以前井船等折々通船有レ之、其後右蛎殻町田沼淡路守下屋敷、雅楽頭相対替被二仰付一候節、前後入口ぇ水門補埋、平日締切、通船之節は辻番所ぇ断次第水門開キ候積リニ相成候処、逐年押埋葭生ニ相成、堀形而已ニ而、今般之様相成、火災之砌又は多人数通行込合候節々、往来之通路を妨、不用地之趣ニ付、埋立地ニ相成候而も可レ然場所ニ相見え、凡千四五百坪程之所故、夫丈ケ道式ニ相成候は、火事繁之所と申、前後屋敷之消防・立除等都合ニモ可二相成一、尤埋込ニ可二相成一石垣取崩、埋立地境之築直し、溝筋仕附置、大雨等之節下水吐手當も可レ仕。下略

（市史稿、救済篇第三―三六九～三七三頁）

○考証六、蛎殻町一丁目の酒井雅楽頭の邸地のことを記した際に「一丁目南部は福井藩松平氏の藩邸となる。」と記して、維新後のここはしばらく埒外におこうとした。今、江戸時代の蛎殻町の邸地について一応の記述を終えて顧みて記述の不備を思う念すこぶる切である。

福井藩邸時代―幼時を蛎殻町で過ごされた、後年の英文学者岡倉由三郎氏に、「わが幼時の記」というすぐれた思ひ出の記のあることが、しきりに思われてならぬ。ここに抄録して、おぼろに霞んだ昔日の町の面影を記し留めておきたい。

ありやなしや―わが幼時の記

岡倉由三郎

「私の蛎殻町時代―横浜で生れて、六つの年に家の事情でそこに移り、それから十八の年まで住んでゐた蛎殻町の家のことを思ひ出すと、何もかも全く夢のやうな気がする。（中略）

ところが明治五・六年頃に横浜に例の大きなパニックが起った。父が蛎殻町の銀杏八幡の側の福井藩邸内へ一家をつれて引揚げたのはこの時であった。

初めて蛎殻町の家へ移った時、私の幼い心に不思議に思はれたことは、四下が殆ど日本橋の町中とは思はれぬほど、いかにも閑寂なことだった。あの辺蛎殻町から浜町辺へかけての一帯は昔は多く大名の屋敷町で、町屋は極く少かったものなのであらうが、私の家なども随分広い庭がとってあったし、名も知れない老樹が所嫌はす欝蒼と茂ってゐるありさまが、今まで人の出入も繁く繁忙な日々に慣れてゐた私の幼い心に、夜などどうかするとあまりの物静けさに物恐しい感じさへ抱かせたものであった。家は無論仕舞多屋であった。

その時分銀杏八幡は、まだ小高い山の上に祀られてあった。その山がちょうど私の家の北側の塀の外に見えて、その名の據って来るところの大銀杏が空に高く聳え立ってゐたものである。

溝とも川ともつかぬ一すぢの小さな流れが、東から進んで来て、それが家の塀に沿ふて鍵なりに曲って流れ込んでゐた。これが稲荷堀で、まだ朝霧の晴れやらぬ夏の朝など、この堀の石垣のあひだへ鰻籠を仕掛けてゐる人の姿を見たことを子供心にぼんやりと憶えてゐる。稲荷堀は一名土井堀とも呼ばれてゐたが、おそらく土井甲斐守の屋敷の前を流れてゐたためであらう。

銀杏八幡の裏手には、その頃大きな池があった。これも多分昔は同じ屋敷の庭の一部分だったのであらう。周囲にはいろんな灌木がみっしり茂って、水の色も青く物寂びてゐたが、この池の中へ私はよく裏づたひに跣足でボシャ〳〵這入って行っては、土止めの杭の間に潜んでゐる手長蝦などを手へ捕ったことを覚えてゐる。夏になると、近所の悪童達と一緒にこの池で泳いだところを見ると、町中にしては相当大きな池だったやうな感じが残ってゐる。

（編者云、記事はなお、四百字詰原稿用紙に写して十枚を残しているがあまり長くなるので、ひとまず割愛する。続きの読みたい方は『季刊、日本橋』第二号を閲覧願いたい。）